

日本における進化論

2680 地区 PDG 田中 毅

ダーウィンは執筆中であった「自然選択」と題された膨大な著作の要約をまとめて、1859年11月に「種の起源」というタイトルを付けて出版した。さらに、1871年には、人間の進化について纏めた著作を「人間の由来」というタイトルで出版した。これらの一連の文献を総称したものがダーウィンの進化論である。しかし、宗教的拘束が強い現在のアメリカの一部公教育では、万物は神が創造したという理由から、ダーウィンの進化論は教科書から形を消すという、奇妙な現象が起きている。

驚くことには日本では、1700年代に、ダーウィンをしのぐような「進化論」に関する数々の研究や著作が発表されている。

鎌田柳弘(1754年~1821年)は、「心学奥の架け橋」の中で次のように述べている。

「一種の草木変じて、千草万期しなり、一種の禽獸無私魚変じて千万種の禽獸虫魚となる」

すなわち植物、動物それぞれの単一起源説に基づく生物進化論が極めて明快かつ説得的に書かれている。そして、彼は人間についてもその初めは禽獸であったものが「展転変化」して人になったものに違いないとはっきり述べている。

単一起源説といい、人間起源に関するこうした説といい、これほどはっきりしたものは西欧にもこの頃はなかったと言えるほど、素晴らしい進化論である。

さらに、「松は土地、高度、栄養によって変化し、赤木、黒松、五葉松、一葉松、白松、蝦夷松は本来同一の松である。」という報告もある。

元禄時代(1668年~1704年)には「あさがお」に関する記録がある。「あさがお」は、もともと熱帯や暖地の野生植物であり、当初は小さな青い花であり、種子を薬として用いたが、交配によって品種改良して、花色、花の大きさの多様化に成功したために、鑑賞用の花として流行したという。

二宮尊徳(1787年~1856年)の「万物発言集草稿」は、学術的な裏付けは無いものの、天地創造から人類の進化までをほぼ正確に述べた大作である。

「天地開け日月あらはれ、雨ふり風吹き、寒暑往来して数百万歳の間、天之恵を地未だ受くること能はず。夫より地の根元をたづぬるに、地に根差し一体を地に半分、天に半分、有始て生じ、其内丈短く生へ形平き、地にすりつき横にはふ形の物より生ず可きなり。夫より草生立、右之順を以て木生ずるなり、其後に至り地を離れ手足羽毛あるもの生じ、夫も極小形の物、短命のもの生じ、段々大虫大畜大鳥生じ、其後漸人物生ず」

「人間はいふに及ばず、草木鳥獸虫魚いまだ生ぜざる時は天地の間一物もなし。幾千万歳を経、草木生じ或は花咲き実法、又実変化して虫生じ、虫変化して魚鳥生じ、魚鳥変化して禽獸龍蛇鮫媧(クジラ)生ず、而て後人間生ず。」

「人間生ず、初之内扶食無く、寒暑の凌ぎ届兼、夫婦道なかるべし、生れては死に、死しては生まれ、此間何百万歳。未田畑開けざれば大食とするもの、春は草木の芽立、秋は果、鳥獸虫魚を食となし、而万歳を経、其中に人体に具足を為し味はいの宜き物五穀の実法。根を食するもの、これを作らんがため、水辺湿地を開き、田と名付けて稲を稲、乾地を開き畠と名付け諸事を植る。食物足りて人道走る。父子

の大道立つ、及夫婦朋友の四倫之逆行る。」

現代文に翻訳すると次のようになる。

天地が創造され太陽と月が現れた。暴風雨が吹き荒れ、寒冷期と酷暑期が数万年間続いた。天地の恵みはまだ齎せられなかった。幾千年万年後、半分地中に、半分地上に出た生物が生まれ、短くて地に這うような生物から草が生まれ、更に進化して木になった。やがて地面を離れて、手足や羽や毛の生えた動物が生まれた。はじめは小さな動物で寿命も短かったが、やがて大きな獣や鳥が現れ、その後に人間に進化した。

当初の天地には、人間は勿論のこと、草木、鳥、獣、虫、魚などは全くいなかった。幾千万年後に、草木が生え花が咲き果実が実った。更に虫が生れ、虫が変化して魚や鳥となり、魚や鳥が変化して獣や龍や蛇や鯨や鯨が生れ、その後人間が出現した。

人間が出現したが、最初の内は食料も不足し、暑さ寒さをしのぐこともままならず、乱交の状態が続いた。何百万年の間、人間は単に生まれては死に、死んでは生まれることを繰り返した。農業を知らなかったため、春には草木の芽を、秋には果物、鳥獣虫魚を食べて命を繋いだ。

何万年か経って、人間は道具を使って五穀を作る方法をあみだし、根を食べるものを作るために水辺の湿地を、稲を作るために田んぼを、乾いた土地には畑を耕して、色々な作物を作った。食物が行き渡ると人間としての道徳が生まれ、父子や夫婦や友人の間に、良い関係が保たれるようになった。

科学的な考証に基づいた進化論ではなく、単なる推論に過ぎないが、1700年代にこのような考え方が日本にあったことは、驚くべきことである。